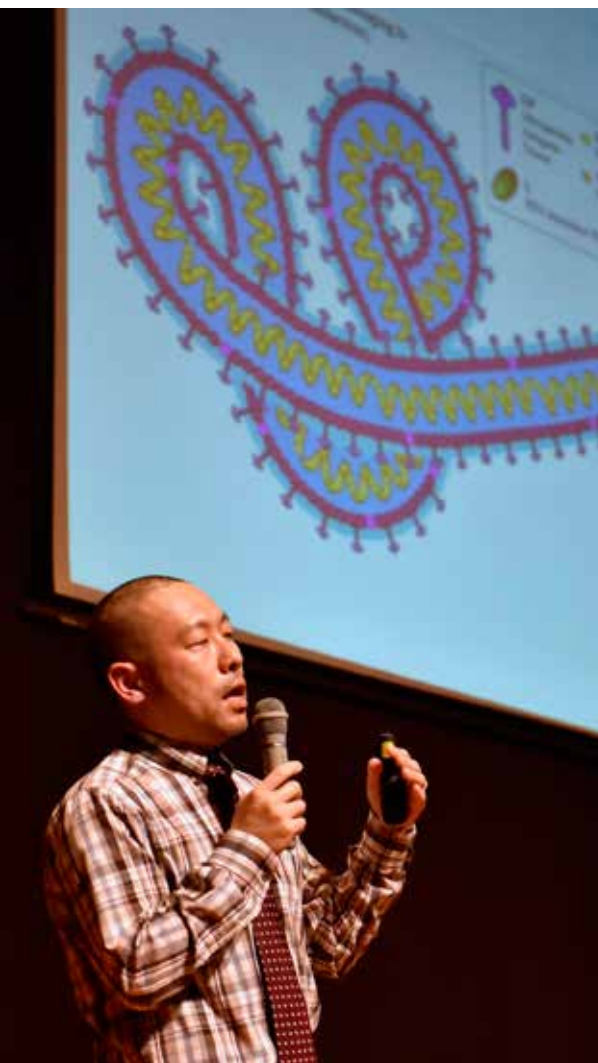


読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



読売教育ネットワーク 創設1周年

記念特集

記念フォーラム **高校・大学の連携重要** 2・3

顧問会議 **本物との出会いを提供** 4・5

レポート

インターン研修報告

英国に広がる難民支援 6・7

お知らせ・短信 9 リレーエッセー 10

2015.11

Vol.10



教育ネットワーク 創設1周年記念フォーラム

読売教育ネットワークは昨年10月11日、読売新聞創刊140周年の記念事業として創設された。創設1周年を記念したフォーラムが9月25日、東京・大手町の読売新聞東京本社で開かれ、ネットワークに参加する企業や学校の関係者など約70人が参加した。「高大接続を考える」をテーマに、鈴木寛・文部科学大臣補佐官（当時）と天野篤・順天堂大学医学部教授の2人が講演。中央教育審議会が昨年12月にまとめた高校・大学教育と入試の一体的な改革を求める内容を会場とともに考える場となった。コーディネーターは、本社の松本美奈・専門委員が務めた。

高校・大学の連携重要

改革のキーワード アクティブ・ラーニング

鈴木氏は、現在文科省が取り組んでいる改革のキーワードの一つは「アクティブ・ラーニング」（児童生徒が議論を通じて問題を解決する主体的、協働的な学習）であると強調。「日本の高校生の最大の問題は、極めて受け身であること。これを脱して、自らの人生をどう歩んでいくかという問題意識、動機付けを持ってもらうため、大学入試のあり方も含め検討している」と報告した。

「受身を脱して 主体的な学びを」 鈴木氏



天皇陛下の執刀医としても知られる天野氏は、順天堂医院での心臓手術に医師を志す高校生を立ち会わせたとを紹介。「早い段階で、医療の現場を見ることで、その素晴らしさを実感してもらう一方、医者になる

という覚悟をもって医学部に進んでほしい」と、画期的な試みの意図を説明した。その上で、「偏差値が高い大学でも国家試験の合格率は必ずしも高くない。これは高校側が学力の高い生徒を医学部に送り込んで、医師になりたいという志を継続して努力しているとは限ら



和田氏「教育の大転換。用意周到な準備を」

明治以来の 教育の大転換

鈴木氏の発言に対し、会場にいた灘中学高校（神戸市）の和田孫博校長から「これは明治以来の教育の大転換となる。アクティブ・ラーニングと言っても、たとえば、源氏物語を読まずに『源氏物語絵巻』の討論をさせても意味がない。予習中心の授業を組み立てる必要がある



ダッタ・シャミ氏「モチベーションに火をつけよう」

ることも含め、用意周到な準備を整えてほしい」との要望があった。

教師の仕事になる」と発想の転換を求めた。

いつでも方向転換できる 柔軟な制度が必要

で学んでいく」とアクティブ・ラーニングに賛同。その具体例として、「知識の確認から始めて、最終的には生徒が自分たちで問いを立てて授業を作っていくインクワイアリー（探究型）の手法がある」と自らの実践を紹介した。

「覚悟を持って 医学部進学を」 天野氏



鈴木氏は「まさに明治以来の改革のつもりでやっている。これまでは、暗記力と反復再現力を高める教育で優秀な工場労働者を育てることに成功し、ジャパン・アズ・ナンバー1と言われるほどになった。しかし今後は、彼らの仕事はすべてデジタルテクノロジーに置き換えられる。これからは人工知能とは違う資質を子供たちに身に付けてもらわなくてはならない」とした上で、「知識の伝達者でよかった教師の役割が今後は決定的に変わってくる。これからは若者の動機付けとなるよう、いかに興味深い課題やあこがれの存在と出会わせてあげられるかが、

て、好奇心をもち、自ら説明する意欲があることだ」と述べ、アクティブ・ラーニングにも通じる「動機付け」の重要性を示唆した。

向転換できる制度が必要ではないか」と、柔軟な仕組みの重要性を訴えた。



柳沢氏「まず大人社会の意識改革を」

市川中学校
宮崎 章 校長
生徒が主体的に取り組めるよう少人数制の「リベラルアーツゼミ」を高校2年生対象に始めました。アクティブ・ラーニングを通し、もっと教養を身につけたいという気持ちを呼び起こしたい。そのための環境づくりもさらに進めています。

国際教養大学
勝又美智雄 教授
高校から大学にかけては、それまでに受けた知識や常識を疑う「自主的に考える」ことを身につけるとき。社会と高校、大学とのつながりを図る教育は重要です。大学だけではなく、高校でも積極的に取り入れてほしい。

旭化成
柳原由華子 さん
企業は基礎的な力、底力のある人を求めています。アクティブ・ラーニングは大切ですが、討論するにはベースとなる知識が必要です。高大連携は良い面もありますが、ハードルをなくしてもいいのかとも思いました。

第一生命保険
荒木善治 さん
発言した高校の校長先生たちの問題意識が高いことに感銘を受けました。教育改革について、高校でも色々努力されていると知りました。こういった問題意識を国や大学がきちんとすくい上げられる仕組みがあるといいですね。

すかいらーく
長田高宏 さん
会社も教育現場と同じで、明日の人材を育てなければなりません。チェーン店の従業員はマニュアルで動いていますが、マニュアルを作る立場の人材をどう育てていくかも大きな課題です。刺激になりました。

学習院女子中等科高等科
増渕哲夫 教頭
高大接続の問題は教育現場にとっても大きな変化なので注目していました。フォーラムでは文科省、大学、高校など、それぞれの立場の違いによる考え方がよくわかり、参考になりました。

参加者の声

参加者の声



顧問会議

読売教育ネットワーク1周年を前に9月25日、東京本社で顧問会議が開かれた。清家篤・日本私立大学団体連合会会長、吉田晋・日本私立中学高等学校連合会会長、老川祥一・読売新聞グループ本社最高顧問、西岡努・読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局長がこの1年を振り返った。

本物との出会いを提供

参加企業、団体、学校数は317に

出前授業は36件

老川 参加企業、学校も数が増えまして317（9月25日現在）になりました。この1年で、出前授業や読売の記者が学校に赴いて行う授業などは合わせると大体160件ぐらいになります。それぞれ順調で、また、学生や親御さんからも大変すばらしいと好評を得ています。

西岡 参加団体による出前授業はこれまで36件行われました。ウェブサイトも今年1月に開設いたしました。これまで450本以上の記事を掲載しております。

清家 今の若い人はバーチャルでは色々なことを知っているんですけれどもリアルに見ていな



清家篤・日本私立大学団体連合会会長

いわけです。しかし、「リア充」という言葉があるようにリアルの世界で充実したいと思っている。それはまさに（順天堂大学の）手術見学であったり（クマムシの）顕微鏡を通じて世界に触れることだったり、実際に本物に触れることがいかに重要かということ、この1年でずいぶん実証されたんではないかと。強いモチベーションを若い人に植えて行くことがとても大きな功績だと思っています。

18歳選挙権、ネットワークで教育を

吉田 しかも単なる現物ではなくて本物中の本物じゃないですか。こういうのはやはり新聞社の力です。普通では現物は見せられても本物は見せられな



吉田晋・日本私立中学高等学校連合会会長

い。

モチベーションというお話ですが、きっかけでもいいと思います。そこに行き着くまでに各学校は本当に苦労しています。それをサポートしていただくのは本当にありがたいことです。

私が今心配しているのは18歳選挙権の話。これも今、子どもたちでまっさらなんです。自分たちが主権者なんて教育を受けてきていない。ぜひこのネットワークで子どもたちにいいものを教えていただきたいなと思います。

西岡 18歳選挙権のお話ですが、「ネットワーク」では年末から年始にかけて色々なイベントを計画しております。また、ホームページにも「18歳選挙権」というコーナーを作りまして、18歳選挙権の出前授業を受け付けるページもあります。



天野篤・順天堂大学医学部教授（左から2人目）の心臓手術を見学する高校生（中央）。命を預かる覚悟を高校生8人が学んだ。

自分で判断する力の育成を

清家 18歳選挙権に意義があるとするれば、将来の日本を考えて選挙しましょうというメッセージです。つまり将来の日本を担う若い人たちが選挙に参加する、という意義はメディアも発信してほしい。皆さんのお話を伺っていて思うのは、リアルが見える場所って限られています。からね。だから先ほどのクマムシの授業など、「日本中どこに住んでいても本物は見られます」ということが大切だと思います。こういう仕組みがないと難

しいですね。もう一つ言うと、変化の大きい時代はなんと言っても自分の頭で判断できる力を養う必要がある。そのためには物をよく見ないと、モノを見て「どうしてだろう」と思わないといけない。そのためには、一つには新聞をよく読まないといけないだろうし、自分が特に関心を持ったことについて本物を見ることが大切だ。

は、上ばかりを目指すのではなく、子どもたちの向き不向きも考えて、いろいろな分野で学べるようにしていただきたい。学校によってはやっていますが、米作り体験なんかはやってみたいとわからないですね。（農家が）大切に育てているということ、都会の子どもたちが知ること、この大事なことを。というのも大事だと思います。



老川祥一・読売新聞グループ本社最高顧問

評価していただいたことを感じました。またこれからの色々と工夫の余地があることもご意見いただきました。今後ともよろしく申し上げます。

読売教育ネットワーク顧問

日本私立大学団体連合会会長	清家 篤
日本私立中学高等学校連合会会長	吉田 晋
東京都教育委員	乙武洋匡
サントリーホールディングス社長	新浪剛史
作家	あさのあつこ
読売新聞グループ本社	
取締役最高顧問・主筆代理	老川祥一



宮城県仙台二高の生徒たちは、校庭で採取したクマムシを電子顕微鏡で観察。慶應大学先端生命研究所の専門家とともに生命の神秘を考えた。



教育ネットワーク この1年

読売教育ネットワークには10月1日現在、小中高校171校、大学43校、企業65社、大学機関や公益財団法人など35団体、3市の教育委員会が参加している。読売ワークシート通信の会員でもある教員と学校司書は約8000人に上っている。教育ネットワーク事務局がコーディネートする出前授業や授業報告などはウェブサイトや会報を使って紹介。サイトでは、多様な教育ニーズにこたえるため、読売新聞のプロジェクトも紹介しており、掲載記事は450本を超えている。

また、選挙権年齢引き下げを受けて実施した18歳選挙権アンケートに参加中高の多くが回答を寄せ、その結果に基づいた連載を読売中高生新聞に掲載している。

参加団体 317
(小中高171／大学43／企業65／団体35／市教委3)

コーディネートした
出前授業や職場見学 36

■参加団体と新たな試み【企画例】

紛争の報道写真取材 出前授業 読売新聞＆陽友学園女子中高
がん研究 特別講座 慶應義塾医学部長＆8校8人
ラグビーと英語 本場の指導 ケンブリッジ大OB＆慶應高、埼玉県立浦和高
エボラ熱最前線 白熱授業 長崎大熱帯医学研究所＆都立西高など8校120人
命預かる覚悟 間近に 天野篤・順天堂大学医学部教授の心臓手術見学 8校8人
仙台二高の夏休み企業訪問 … 生徒150人が2班に分かれて三菱商事、新日鉄住金を訪問

※参加団体数は2015年10月1日のデータ ※出前授業数は14年10月から15年9月の実績

英国に広がる

難民支援

プレコン最優秀の太田さん インターン研修報告

ロンドンで受け入れ求めるデモ取材

「第3回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」(主催：神田外語グループ、読売新聞社)で最優秀賞を受賞した横浜国立大学2年の太田杏奈(おおた あんな)さん(19)が、9月18日までの2週間、優勝の副賞として読売新聞ロンドン支局の新聞記者のインターン研修を行い、難民問題を取材した。太田さんの取材記事を紹介する。

欧州はこの夏、難民問題に揺れた。内戦に苦しむ中東地域から押し寄せる難民や移民の波はやむことなく、いまも解決策を見いだせていない。ロンドンでは、英国の難民受け入れ策に不満をもつ人たちの大規模なデモが起き、市民団体や教会関係者が遠く離れた異国からたどりついた難民たちに支援の手を差しのべていた。現場を訪ね歩き、人々の声を聞いた。(ロンドンで 太田 杏奈、写真も)

ロンドン中心部でデモ

力強く振られる旗、太鼓や笛

の音、あちらこちらから上がるかけ声。9月12日、難民をもつと受け入れるよう求める数万人が、ロンドン中心部のハイドパーク近くからウェストミンスター寺院まで約3キロ^{キロ}を行進した。「ぼくは、アフガニスタンの戦争や不当逮捕から逃げてきた両親の話を聞いて育った。同じ問題を抱える人を助けることは正しいことだと思う」。両親がアフガン難民のラーモン・モハンマディ君(16)はそう語った。アフリカ南部ジンバブエから逃れてきたという女性も「今度はわたしが何かをしてあげる番よ」。



【欧州の難民問題】 地中海を渡って欧州に入った難民・移民は、今年30万人(1～8月)を超える。欧州連合(EU)は16万人の難民を分担して受け入れることを話し合っている。イギリスのキャメロン首相は9月7日、2020年までに最大2万人の難民を中東の難民キャンプから直接受け入れると表明した。すでに欧州にいる難民の受け入れは対象にしていない。



参加者は元難民、お年寄り、家族連れ、学生……

デモの参加者には、英国で難民として認定されて暮らしている人も多かった。自分や家族の経験といまの難民問題を重ね合わせて、声をあげずにはいられない気持ちでデモに参加しているのだった。

ほかにも車いすのお年寄り、家族連れ、学生……。実に多彩な人々が参加していた。派手な色に髪を染めた18歳の高校生2人組は、イギリス中西部バーミンガムから夜行バスでやってきた。「ようこそ難民」「利益の前に人々を」「大切な難民の命」などと書かれた看板を掲げた人もいる。フェイスブックで呼びかけられたデモには9万人以上が参加を表明した。実際にそれだけの人が集まったかどうかは不明だが、最終地点のウェストミンスター寺院付近の6車線ほどの広い道路は、デモの人々で埋め尽くされた。

支援と交流の場

難民として認定されて新しい生活が始まって、言葉や食べ物、文化、習慣が異なる英国で、難民たちは孤立しがちだ。そんな人々が少しでも肩の力を抜いて過ごせる交流の場を提供しよ

うという人たちもいる。

ロンドン南部のストックウエルにある公民館では、市民団体「ザ・ロンドン・ウェルカム・プロジェクト」が日曜正午から午後5時まで交流の場を提供している。無料で昼食やコーヒー、紅茶を振る舞う。気軽に立ち寄れる雰囲気、飲食以外にもボードゲーム、映画、古い自転車を修理して再利用する企画などがあり、20から30人が入れ代わり立ち代わり訪れていた。

参加者もボランティアも肩を並べて、昼食で食べる野菜やソーセージを切りながら世間話に花を咲かせる。5、6歳の子供たちは絵を描いたり、ジェンガをしたりしていて、お年寄り

の男性はそれを見守るかのよう

に静かに新聞を読んでいる。この団体に2年前から参加しているイギリス東北部出身の大学3年、ジェイミーさんは「せっかくロンドンの大学にきたのだから何か人助けになる活動をしたかったんだ」と話した。

ロンドン中心部のノートルダム・フランス教会にも、難民センターがある。教会が、地元のカフェやパン店の寄付で週2回運営している喫茶室では、サンドイッチやコーヒーが無料で楽しめる。仏語圏のアフリカ難民を中心に70人から80人が立ち寄り、会話を楽しむ。パソコンが2台あり、メールのチェックなどもできる。



大学生の力

英国では、たくさんの大学生たちがボランティア活動に参加している。

NGO団体「スター(STAR)(Student Action for Refugees)」は、英国内30か所以上の大学にグループがあり、ロンドンには職員数人が常駐する事務局もある。1994年にノッティンガム大学の学生が始めたサークル活動から広がった。

通常、難民支援に携わるのは法律や医療の専門知識を持つ社会人や、仕事を引退した高齢者で、難民と支援する人の置かれた状況が大きく異なることが多い。スターは、難民と世代も教

育レベルも近い学生が支援して

いるのが特徴だ。スターのエマ・ウィリアムズ事務局長は「難民の多くは若い男性で、国を出るための資金を調達できる」と指摘する。

そんな難民と学生ボランティアの間には、年齢や趣味嗜好を始め、共通点がたくさんある。お金がないのもそのひとつだ。はやりの映画や人気スポーツの話をして、公園で昼食をとる。ウィリアムズ氏は「学生といるとき、難民の若者たちはほっとした表情を浮かべる」と話した。難民の人々にとって、学生たちと過ごす時間は安心感につながっているようだ。



貴重だった生の体験

取材を終えて

太田 杏奈

「どうしてデモに参加しているんですか?」。ロンドンでデモ参加者にこんな質問をぶつけると、たいてい、どうしてそんな当たり前の質問をするのかという顔をされて、こんな答えが返ってきた。「行くあてもない人たちであふれるこの状況を変えたいからさ」

数万人が参加したデモに最初から最後まで同行して、難民問題への人々の関心の高さを肌で感じた。でも、難民を受け入れることは最初の一步でしかない。難民にとっては、異国での新生活は不安や心細さでいっぱいだろう。そんな気持ちを少しでも和らげ、希望を抱けるような場はあるのだろうかと思い、支援の現場を探し、足を運んだ。

難民に交流の場を提供する団体で、わたしはほかのボランティアと同じように、子供たちと紙飛行機を飛ばし、塗り絵をした。まるで自分の兄弟と遊んでいるかのような気持ちだった。支援の現場は、ボランティアと難民という関係だけでは成り立たない。人と人の温かみのある交流が大切だと実感した。もちろん、難民の人々は法的な援助や専門的な助言も必要としている。それはそれとして、誰にでも一人の人間として、何かしら貢献できることがあると感じた瞬間だった。

新聞社、しかもロンドン支局という海外の職場でのインターン経験は、わずか2週間という短い期間だったが、非常に密度の濃い時間を過ごすことができ、とてもいい経験になった。

わたし自身が大学生であることもあり、学生のうちにボランティアなどを通じて社会で生の経験をするのが大切なことも学んだ。そこには新たな発見や心を揺さぶられる瞬間がある。時間も体力もある学生のうちに、いろいろなことにチャレンジしたい。

ロンドンのインターン研修

「第3回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」(主催：神田外語グループ、読売新聞社)で最優秀賞を受賞した太田杏奈さんには、副賞として、読売新聞海外支局のインターンシップ参加権利が与えられた。ロンドン、バンコク、ニューヨーク、ワシントンの4支局の中から、太田さんはロンドン支局での研修を希望した。「来年からオーストラリアに留学しますが、その前に同じヨーロッパ圏を見たいと思いました」と太田さん。7年前から文通を続けてきたイギリス人のペンパルと会ってみたい、というのもロンドンを選んだ理由の一つだったという。

取材テーマの設定は渡英前から進められ、太田さんは、関心を持ついくつかのテーマの中から、「多文化都市ロンドンにおける難民問題」の取材を希望した。研修期間中はロンドン支局記者の指導を受けながら、英語での取材依頼や、難民支援デモ、難民支援団体の取材に取り組み、最後に原稿を執筆した。このほか、英国の民間調査機関「国際戦略研究所」の記者会見などにも同行し、記者の仕事を体験した。

品川 de 秋の大学トーク



偏見、差別解消のために

偏見や差別をなくすためにどうすればいいかを考える「品川 de 秋の大学トーク 対立を乗り越える心と実践」(京都大学、京大芸術出版会、大学出版部協会、活字文化推進会議など主催、読売新聞社、読売教育ネットワーク後援)が10月17日、東京都港区の京都大学東京オフィスで行われ、約70人が講演に耳を傾けた。

3人の研究者が、差別や偏見について、それぞれの研究内容を発表した。

偏見を持つ特性の理解を

三重大学専任講師の栗田季佳^{ときか}さんは、「見えない偏見——障害者を取り巻く問題に現れる心の問題」をテーマに、心理学の観点から分析した。

1940年代の障害者に対する差別を取り上げた記事を示しながら、差別の是正に向け、その後日本は障害者との共生の実現に向けて歩を進めており、今の社会では差別というのは一見減っているように見える。一方で、「障害者を自分と異質な存在と認識する点で、昔も今も自分と違う人を排除する心の動きはあまり変わっていない」と指摘。「水面下に押しやられていく偏見があることも知っておく必要がある」と強調した。

そして、差別、偏見をなくす方法としては、障害を理解すると同時に、偏見を持つ傾向がある、という人間の特性も理解しておく必要がある、と結んだ。

バリアが生まれる背景を考えよ

次に登壇した東京大学大学院専任講師の星加良司^{はしかりょうじ}さんは、「バリアフリーという挑戦——『社会を変える』ことは可能か」をテーマに、マジョリティーによって作られたマジョリティーに都合のいい社会は、障害者を不利な社会的位置に存在することを余儀なくさせるから、「障害者に対する差別や偏見は解消しづらい」と説明。そうした傾向が強まらないようにする取り組みが重要だ、と訴えた。

そして、バリアフリーの問題を解決するためには、個々人が自分の生きる社会の中でどのようなバリアが生まれているのかを反省をこめて考えることが重要だ、と語った。

異質なものを排除する効率化した社会

慶應義塾大学教授の岡原正幸^{おかはらまさゆき}さんは、栗田さんと星加さんの発表について「(障害者問題に

関心を持つて研究を始めた)30年前と事態が変わっていないことにがくぜんとした」と言い、異質なものを排除すればするほど、効率化していくが、「そういう社会はどうか」と問いかける一方、障害者差別解消法など様々なことが法制化され、それはそれで大事なことであるが、「原点に返れば、個別に対応できることがもつとある」と強調した。



(左から)岡原正幸さん、栗田季佳さん、星加良司さん



18歳の1票

11月29日(日) 読売新聞東京本社で

「18歳の1票 主権者教育セミナー」参加者募集

選挙権年齢の引き下げを受け、教育現場で求められる取り組みを考える「18歳の1票 主権者教育セミナー」を行います。

東京大の小玉重夫教授が海外のシティズンシップ教育などについて基調講演、文部科学省の合田哲雄・教育課程課長が主権者教育の副教材などについて説明します。また、硯合(そあい)宗隆・玉川学園教諭の高校生向け模擬授業を予定しています。

教育関係者のほか、関心をお持ちの方の参加を募集します。

- 日時 11月29日(日) 13:00~16:00 ■参加費 無料
- 場所 読売新聞 東京本社内会議室(東京都千代田区大手町1-7-1)
- 申し込み方法 はがきに①~⑥を記入の上郵送下さい。

①氏名(ふりがな) ②年齢 ③郵便番号 ④住所 ⑤電話番号(日中連絡可能) ⑥勤務先名称

【宛先】 〒100-8055 (住所不要)

読売新聞東京本社 読売教育ネットワーク事務局「主権者教育セミナー」係

■締め切り 11月6日(消印有効) ※申し込み多数の場合は抽選。

※参加いただく方には、聴講券としてはがきを送ります。セミナー当日お持ちください。

■問い合わせ 読売教育ネットワーク事務局 03・3217・1967(平日10:00~17:00)

主権者教育セミナー 参加者募集

選挙権年齢を18歳以上に引き上げる公職選挙法が、衆議院の賛成から通過され、高校生の半数が賛成します。高校生活を送る中で、主権者としての責任を担う機会になります。生徒・児童が社会参加へ向く主権者教育のあり方を、参加者の経験とともに見ます。

11月29日(日) 13:00~16:00

2015.11.29 SUN

【主権者教育の意義と海外事例など】

合田 哲雄 文部科学省教育課程課長

【副教材の強みと政治的中立性などに関する新通知の解説】

小玉 重夫 東京大学教育学部教授

【玉川学園で実践している主権者教育の模擬授業】

硯合 宗隆 玉川学園教諭

会場 読売新聞東京本社内会議室(東京都千代田区大手町1-7-1)

参加費 無料

申し込み方法 ①氏名(ふりがな) ②年齢 ③郵便番号 ④住所 ⑤電話番号(日中連絡可能) ⑥勤務先名称

【宛先】 〒100-8055 (住所不要)

読売新聞東京本社 読売教育ネットワーク事務局「主権者教育セミナー」係

締め切り 11月6日(消印有効) ※申し込み多数の場合は抽選。

※参加いただく方には、聴講券としてはがきを送ります。セミナー当日お持ちください。

お問い合わせ 読売教育ネットワーク事務局 03・3217・1967(平日10:00~17:00)

聴講者募集 読書教養講座

「小説の可能性」

直木賞作家・道尾秀介さん講演

小説「背の眼」「向日葵の咲かない夏」などのヒット作で知られ、作家生活10周年を迎えた直木賞作家の道尾秀介さんが、話題作を次々と生み出す創作の秘密と小説の可能性を語る西南学院大学の公開授業読書教養講座の「小説の可能性」(主催:西南学院大学、活字文化推進会議)が開かれます。

コーディネーターは法学部の田村元彦准教授で、西南学院大生とのトークセッションも行われます。

- 日時 12月2日(水) 15:10~
- 場所 西南学院大学(福岡市早良区)
- 入場無料(聴講券が必要です)
- 申し込み方法 はがき、FAX、電子メールのいずれかに①~⑤を記入の上送付下さい。11月20日(金)必着。

①「西南学院大学聴講希望」②郵便番号、住所 ③氏名、年齢 ④職業 ⑤電話番号

【はがき】 〒100-8055 (住所不要) 読売新聞東京本社 活字文化推進会議事務局宛

【FAX】 03・3217・4309

【メール】 katsuji@yomiuri.com

※応募多数の場合は抽選。 ※発表は聴講券の発送をもって代えさせていただきます。



読売中高生新聞 新CMとポスターが完成

昨年11月創刊の「読売中高生新聞」の新しいCMとポスターが完成しました。前作に出演したタレントの西山潤さんと紺野彩夏さんをメインキャラクターに起用しています。

テレビCMは 西山さん演じる男子生徒が、紺野さん演じる女子生徒に告白するものの切り返されてしまう様子を描いており、日本テレビ「ワーズハウスへようこそ」(毎週土曜20:54~、関東地区のみ)、BS日テレ「深層NEWS」(月曜から金曜22:00~)などで放映中です。

ポスターは、中高生新聞が「世界新聞協会賞」を受賞したことを、「世界に挑む10代に、世界が認めた新聞を。」のキャッチコピーで表現したものを制作しました。

動画などは、ウェブサイト「読売新聞ブランド企画部」の専用コーナーでも視聴できます。

<http://pr-yomiuri.com/topic/teen> (サイトへ→)



海外で学ぶ・リレーエッセー ⑩

米オーバリン大学

「知らなかった世界、見えてきた世界」

雙葉高校（東京都千代田区）卒、米オーバリン大学3年

宮垣舞さん



朝7時、トイレに行くと、同じ階の男子寮生が歯を磨いている。

「おはよう、マイ。元氣？」

「元氣。そっちは？」

オーバリン大学に来て2年が過ぎ、男女共用トイレも当初ほど抵抗がなくなってきた。オーバリンの学生がよく何気なく言うように、男性、女性という性別の2元体の概念は、社会が作り上げてきたものののだ。

オーバリンは米国で最初にアフリカ系学生を受け入れ（1835年）、女子学生を受け入れ（1841年）た高等教育機関、「リベラル」や「革新的」といった校風が有名だ。専攻に関係なく、人種差別、性の差別、環境破壊に反対する情熱を持つ学生が集まってくる。社会を変える最初の一步として、学生たちは男女共用トイレの採用や社会問題に対するデモなどを通して大学改革を行ってきた。社会を変えようとする勢いは、日常会話の中からも感じられる。

オハイオ州のこの学校はま



大学のイベントに参加する宮垣舞さん(本人提供)

た、リベラルアーツ・カレッジと音楽院から構成されており、一般教養科目と専門的な音楽課

程の科目という日本ではあまり見かけない組み合わせを可能にしている。学生たちはカレッ

ジ、音楽院双方からクラスをとることができ、学生の6%はダブル・ディグリー・プログラムを通して実際に二つの学位を得る。卒業後の進路は、音楽家、俳優、研究者、ジャーナリスト、活動家など様々だ。

日本が恋しくなることもあるが、最近、日本での生活がいかに違うものだったのかを認識するようになった。思い返せば、日本にいたときは、社会の和を乱さないようにルールに従うことを主に学んでいたような気がするのだ。オーバリンの友達が、今日の社会問題と真剣に向き合っているのを初めて見たとき、自分の世界が崩れていくように思えた。本当に正しいことは何なのか？そのために私には何ができるのか？あらゆる疑問に襲われ、私が今まで慎重に築き、しがみついていた世界が少

しずつ崩れ、変わり始めたのだ。

自分の価値感を維持しつつ新しい考え方を受け入れられるようになるために、私は自分なりに社会に貢献できる方法を求め始めた。「ダブル・ディグリー・プログラム」にチャレンジをして、元もとのピアノの専攻に加えて社会学も勉強することにした。社会の構造とともに、音楽が社会に与える影響力を学ぶことによって、音楽の力で社会的経済的格差を埋めていけないか、模索中だ。オーバリンは、ありのままの私を受け入れてくれ、そして少しずつ成長させてくれるのだ。

（会報編集部抄訳「The Japan News 2015年5月22日」）



オーバリン大学

1833年創立。学生数は2900人で、うち7.9%が50か国からの留学生。大学のモットーは「勉学と勤労」

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。

英語の原文は<http://the-japan-news.com/news/article/0002126535>でお読みいただけます。